

鉄は、共生する人と街を結ぶ パブリックアートの新しい潮流を「ファーレ立川」に見る

アートが美術館やギャラリーから飛び出し、都市や社会と接点を持つ“パブリックアート”。
1980年代にアメリカから導入されたこの概念は、これまで都市計画において産業や経済の効率を優先してきた日本でも、これから積極的に導入が図られようとしている。
そうしたムーブメントのあり方と、その中で鉄やステンレスが果たしている役割について、1994年10月にオープンしたパブリックアート・エリア「ファーレ立川」を採りあげてみた。



JR立川駅方面より「ファーレ立川」を望む

日本や広範な諸外国から92名、 109の作品が存在するエリア

J R 立川駅北口から歩いて約5分ほど。そこから「ファーレ立川」は始まる。東京都と立川市から委嘱を受けた住宅・都市整備公団が、旧立川基地後の国有地を主に民有地を合わせた5.9haの土地を再開発したものだ。高さが統一され、壁面のパターンや色彩にも共通性を持たせた、デパート、ホテル、映画館、オフィスなどの建物が、歩行者用

デッキで巧みにつなが合わされている。
イタリア語の“創造する”＝“F A R E T”から命名されたこのエリアには、日本人43人をはじめ、ヨーロッパ、アメリカ、アジア、アフリカの広範な諸外国から49人、計92名のアーティストの手による109の作品が、さりげなくたたずむように存在している。それは展示ではなく、まさに存在という形容がふさわしいほど都市空間と一体となっている。



①青木野枝（日本）
「換気塔」（スチール）



②エステル・アルバルダネ（スペイン）
「タチカワの女たち」（スチール）

④ゲオルギー・チャブカノフ（ブルガリア）
「道祖神（立川の動物たちー羊）」
（スチール）



③ジョナサン・ボロフスキー（アメリカ）
「ブリーフケースをもった男」（スチール）

デパートの前には、フランスのジャン・ピエール・レイノーによる高さ5 mもの赤い巨大な植木鉢を置いた「鉱物の庭」があり、その傍らの駐輪場の上方には、アメリカの巨匠ロバート・ラウシェンバーグの手によるステンレスの枠組みにネオン管を配した自転車がガラス箱に収まりながら、夜は駐輪場サインの役目を果たしている。また、そのすぐ近くには、フランスの女性作家ニキ・ド・サンファルの蛇をモチーフにした極彩色のベンチや、ナイジェリアのサンデー・ジャック・アクパンの鮮やかに彩色された彫刻が並ぶ。

この「ファーレ立川」のパブリックアート計画は、アートディレクターである北川フラム氏が代表を務める、アート・フロント・ギャラリーのプランがコンペにより採用された。北川氏は計画に当たるに際し、都市に『森』を創造することを基本的な考えに3つのコンセプトを立てたという。

1つ目は「世界を映す街」。そのために、可能な限り多くの国のアーティストに参加を呼びかけるとともに、すでに実績のあるアーティストはもちろん、従来の枠にこだわらないコンセプト、素材、技法を求めるという方針のもと、ここから巣立っていくような中堅や若手層も多く起用したとのことである。2つ目は「ファンクション（機能）をフィクション（アート）に」結びつけるということ。109の作品のうちその8割は、ビルの外壁・排気塔などの機能的な部分や、各種掲示板などのサインや道しるべ、歩道の車止めや街灯などといった、都市と人間の双方に必要不可欠な役割を与えられている。

最後の3つ目は、「驚きと発見の街」。個々の作品のほとんどは、見るだけでなく、触って感じてもらうためにヒューマンスケールで製作されており、また、作品との直接の出会いを大切にしてもらうために、基本的にアーティスト名やタイトルなどを記したプレートはつけられてはいない。

人間の友達としてのアート。

鉄の持つ柔らかさはその理念に通じる

北川氏にプランニングの過程や完成までのストーリー、さらに、これからのパブリックアートでの、鉄の可能性についてお話をうかがった。

北川氏は語る。

「私がまず意図したのは、人間の友達としてのアートです。これまでのパブリックアートは、モニュメンタルで威圧的なものがほとんどでした。しかも、その材質も、メンテナンスを考え、石とステンレスに限られていたのです。今回は、結果的に、鉄を使ったものが多くなりました。加工したものもあれば、サビを生かした生身の鉄むき出しのものもあります。私はこれにより、表現の幅が非常に広がったと思っています。特に鉄の持つ柔らかさは、人間の精神や生活への接近を感じさせます。これは、都市に『森』を創造するという基本理念や3つのコンセプトにも通じるのです。そして、これから求められるであろう、“生きている実感のするアート”というものにも、鉄はとても魅力ある素材だと思うのです」

古来より人間は鉄を使って文明を切り拓き、文明は文化を生み育んできた。しかし、その一方でこれまでの文明や文化に対する見直しの気運が高まっている事実も否定することはできない。北川氏は、そのプランになぞらえて自らを“森の番人”だと称した。「ファーレ立川」の試みは、『森』から離れ都市化することで発展してきた従来の流れとは異なり、等身大のアートという媒介を通して『森』と共生する、これからの人と街のあり方への方向性を指し示している。

⑤ アニッシュ・カプーア (インド)
「山」(アイアン)



⑦ 伊藤 誠 (日本)
「換気口」(スチール)



⑥ 柳 健司 (日本)
「笠木」(ステンレス、ネオンチューブ)

⑧ タデウス・ミスロウスキー (ポーランド)
「車止め」(スチール)



[写真協力: ①～⑧ 安斎重男]